

新时期：成人期自陶症者余暇活动
调查研究

青年期・成人期自閉症者の余暇活動に関する研究

大分大学 小林 隆 児

はじめに

従来わが国の自閉症療育は主に彼らの発達をいかに促進していくか、いかに好ましい行動を獲得させて社会適応能力を高めていくかといった観点から検討されることが大半であった。このような観点はともするとわれわれ「健常者」にとって好ましいと考えられる基準を想定した上での議論になりやすい。発達期を過ぎた自閉症者が現実にはどのように過ごしながら人生を享受しているかその現状を把握し自閉症療育を再検討することは、彼らの生活の質の向上を願うという本来の目的からしてなによりも求められることである。自閉症者の社会的予後を考える際に、彼らの余暇活動、つまり自由な時間をいかに楽しく過ごせるかということが非常に重要な要素であることが最近とくに強調されるようになってきた^{6,11,19,25)}。

筆者らは昨年自験例の自閉症について追跡調査を行い、その主な結果についてはすでに別の機会に発表した^{11,13,14)}。その際、彼らの現在の余暇活動についても同時に調査したのでその結果について報告する。

I 調査対象

1990年4月現在、18歳以上に達している自閉症で今回の調査開始時の対象数は231例であったが、そのなかで追跡が可能であったものは201例

TABLE 2 社会的転帰 (生存例のみ N=197)

	例	(%)
就 労	41	20.8
家業の手伝い	2	1.0
大 学	5	2.5
短期大学	1	0.5
専門学校	5	2.5
精神薄弱者授産施設通所	27	13.7
精神科デイ・ケア, 作業所通所	17	8.6
自閉症専門施設入所	32	16.2
精神薄弱者更生施設入所	43	21.8
精神科の病院入院	4	2.0
在 宅	18	9.1
養護学校高等部	2	1.0

(87.0%)であった。追跡期間内に死亡したものは4例(すべて男性)で、死亡率はおよそ2%であった。死亡例を除いた197例(男性166例, 女性31例)の初回面接時年齢は平均6.4歳(SD 2.8), 追跡期間は平均15.4年(SD 4.5)であった。対象例の診断はDSM-III-Rの自閉性障害 autistic disorder にすべて合致し、このうち発症年齢が3歳以上のものが8例含まれていた。

調査時点での対象の年齢分布はTABLE 1のとおりで、平均年齢は21.8歳であった。

197例の現在の社会的転帰(TABLE 2)をみると、41例(20.8%)が有給雇用条件で就労していた。大学、短期大学、専門学校に通う例も就労の可能性は高いと思われた。これら望ましい社会的

TABLE 1 現在の年齢分布 (生存例のみ N=197)

年齢	18-19	20-21	22-23	24-25	26-27	28-29	30-31	32-33	合計
男性	59	43	24	24	10	2	3	1	166
女性	8	7	6	5	1	2	0	2	31
合計	67	50	30	29	11	4	3	3	197

転帰であった例は全体のおよそ1/4であった。しかし、施設入所（自閉症専門施設や精神薄弱者更生施設）例は75例（38.0%）と依然多数を占めていた。

現在の発達水準を言語発達水準（Present Language Development Level, PLDL）（TABLE 3）と適応水準（Present Adaptive Level, PAL）（TABLE 4）の両面にわたって5段階評価を行った結果をTABLE 5に示した。言語発達水準ではおよそ半数は良好（GoodとVery good）であったが、適応水準では良好例が1/4と少なく、およそ半数は不良（PoorとVery poor）であった。

TABLE 3 現在の言語発達水準の判定基準

Very good	: 言葉の表現力は豊かになり、会話もほとんど不自由なくできる
Good	: 会話もできるが、未だぎこちなさと不自然なところが残っている
Fair	: 日常生活の言葉はかなり理解できるが、会話はまだ困難がある
Poor	: まだオーム返しのみられ、単語レベルの発語がほとんどである
Very poor	: 発語があってもほとんど有意味語がないか全く話し言葉をもたない

TABLE 4 現在の適応水準の判定基準

Very good	: 就労（就学）ができていて、ほぼ満足のいく適応ができていて、周囲からも仕事ぶりや能力が認められる存在になっている
Good	: 就労（就学）ができていて、特に人の手をかりず、ほぼ一人で普通の生活ができています
Fair	: 多少は人間関係に変わった点が認められるが、家庭生活や社会生活が営まれている : 今は就労ができていないが、日常生活は特に人に迷惑もかけずできている
Poor	: かなり行動や人間関係に変わった点を認め、自立的社会適応ができず、人の援助が必要である
Very poor	: 社会性が乏しく自閉的で社会適応も困難で、周囲の人の援助や介助が必要な状態である

TABLE 5 現在の言語発達水準と適応水準（N=197）

判定基準	現在の言語発達水準		現在の適応水準	
Very good	32例	16.2%	21例	10.7%
Good	60	30.5	32	16.2
Fair	63	32.0	53	26.9
Poor	18	9.1	45	22.8
Very poor	24	12.2	46	23.4

II 調査方法

調査方法は追跡調査の際に自由記述式で保護者に依頼した。なお、余暇の定義は石井⁶⁾による「外部から強制された勉強や仕事および日常生活に必須の食事、排泄、睡眠などを除いた時間」に準じ、「現在子どもが余暇（すなわち仕事、勉強、日常の家事などを除いた自由な時間）をどの

ように過ごしているか」を具体的に記述してもらった。

III 調査結果

1 余暇活動の種類と結果（TABLE 6）

不詳のもの8例を除くと、特に余暇活動が認められなかったり、無意欲に過ごしているものは19例（10.1%）であった。19例をPLDL別にみると、不良が14例（73.7%）と大半を占めていたが、PAL別にみると全例とも不良（Poor 3例、Very poor 16例）であった。この結果から特に余暇の活動の乏しさと適応能力の低さとの間には強い関連性があることが明らかになった。

自由記述式の調査のため活動内容は今回便宜的にTABLE 6のように分類した。すなわち、音楽関連のもの（鑑賞、演奏、歌唱、レコード収集など）、映像関連のもの（映画、ビデオ、テレビな

どの鑑賞）、読書（本を読んだり、ながめたり、収集する）、スポーツ（実践と観戦）、ゲーム、散歩、創作、買い物などのほかに、彼らの余暇活動に特徴的と思われた乗り物に関連した活動を独立した項目として設けた。

余暇活動の種類をPLDL別にみると、音楽関連の活動が全体に最も多く86例（45.5%）で、良好群では半数以上を占めていた。次いで映像関連の活動が61例（32.3%）で、良好群で高い率を示していた。読書は35例（18.5%）にみられたが、Good群で最も多く18例（32.1%）であった。スポーツ関連の活動をみると、実践しているものは26例（13.8%）あったが、観戦は5例（2.6%）と非常に少なかった。実践しているものをPLDL別にみると、Very good群はわずか1例（3.3%）で、Good群（12例、21.4%）とFair群（10例、

TABLE 6 現在の言語発達水準 (PLDL) 別にみた余暇活動の種類* (N=197)

PLDL	例数	音楽関連	映像関連	乗り物 関連	読書	スポーツ		買い物	散歩	創作	ゲーム	なし	不詳
						実践	観戦						
Very good	30	17(56.7%)	12(40.0)	14(46.7)	7(23.3)	1(3.3)	3(10.0)	2(6.7)	2(6.7)	4(13.3)	1(3.3)	0(0)	2
Good	56	30(53.6)	20(35.7)	14(25.0)	18(32.1)	12(21.4)	1(1.8)	8(14.3)	5(8.9)	8(14.3)	2(3.6)	1(1.8)	4
Fair	61	28(45.9)	19(31.1)	16(26.2)	7(11.5)	10(16.4)	0(0)	12(19.7)	13(21.3)	8(13.1)	4(6.6)	4(6.6)	2
Poor	18	7(38.9)	3(16.7)	2(11.1)	0(0)	1(5.6)	0(0)	4(22.2)	2(11.1)	0(0)	2(11.1)	5(27.8)	0
Very poor	24	4(16.7)	7(29.2)	5(20.8)	3(12.5)	2(8.3)	1(4.2)	3(12.5)	1(4.2)	1(4.2)	3(12.5)	9(37.5)	0
	189**	86(45.5)	61(32.3)	51(27.0)	35(18.5)	26(13.8)	5(2.6)	29(15.3)	23(12.2)	21(11.1)	12(6.3)	19(10.1)	8

*余暇活動の種類は重複回答が多い。各項目の数字は実数を示す。括弧内の数字は PLDL 各群の総数のなかで占める率を示す。

**不詳の8例を除く

16.4%) にはるかに多く認められた。買い物は29例 (15.3%) にみられ、Poor 群 (4例, 22.2%) と Fair 群 (12例, 19.7%) に多く認められた。散歩は23例 (12.2%) あったが、Fair 群が13例 (21.3%) と群を抜いて多く、次いで Poor 群 (2例, 11.1%) が高い比率を示していた。創作活動は21例 (11.1%) あり、Very good 群 (4例, 13.3%), Good 群 (8例, 14.3%), Fair 群 (8例, 13.1%) とともに同様な比率を示し、不良群ではほとんどみられなかった。ゲームは12例 (6.3%) みられ、不良群 (Poor 群11.1%, Very poor 群12.5%) で多かった。

2 余暇活動の内容について

1) 音楽関連の活動

音楽鑑賞がもっとも多く、内容はアイドル歌手の歌、演歌、クラシック、劇画の主題歌、童謡などであった。なかには同じ曲を数年ずっと聞き続けている例があった。自分で楽器演奏 (エレクトーン、オルガン、ピアノなど) や声楽などの音楽活動を楽しんでいる例は少なくわずか5例であった。

2) 映像関連の活動

大半がテレビやビデオの鑑賞であったが、特にクイズ番組を好むもののなかに、ビデオにわざわざ録画して何度も楽しんでいる例もあった。さらに独特な方法でテレビ鑑賞をしている例があった。以下、具体的な例を挙げる。

症例1 22歳, 男性

PLDL Very good, PAL Good, 固執性#, 社会的処遇 就労 (畳店雑役夫)

余暇の過ごし方 ラジオとテレビを同時につけ

て楽しみ、ほとんど同じテレビ局をみている。そのほか小学4年より毎日日記をつけていて、ひげを隔日に2時間くらいかけて電気カミソリで剃るのが習慣である。

症例2 25歳, 男性

PLDL Good, PAL Poor, 固執性#, 社会的処遇 病院デイケア通所

余暇の過ごし方 テレビのチャンネル遊びを好み、3台あるテレビを同一チャンネルにしたり、ラジオと同一放送の時はテレビの音声を消してラジオをつける。また二カ国語放送の時、一方を日本語に他方を外国語にして行ったり来たりして見ている。さらにNHK大河ドラマに関する資料漁りに熱中し、本屋の店頭や図書館で歴史小説、地誌、旅行案内などを拾い読みしては、同時代のドラマのヒーロー、ヒロインを結合させたシナリオをワープロで作文し、郵便局から速達でNHKに投書したりして過ごしている。そのほか、プラモデルの製作、地図や時刻表を使って旅行計画を立てるのを楽しんでいる。しかし、旅行の費用の計算は保護者が指摘しないと自分からはしようとしていない。

3) 読書

本の内容を具体的にあげると、アニメ雑誌 (アニメーション映画の紹介雑誌)、旅行、地図、鉄道、クイズ、まんが、車、映画、怪獣などに関連したものであった。ほかに昔から現在までのアルバムを繰り返し見て楽しんでいる例もあった。本来の読書の楽しみが虚構の世界や他者の精神世界への同一化を楽しむことであるとするならば、自閉症者の好む内容は視覚的イメージを楽しむ傾向が強く、ここにも彼らの精神内界の貧困さがうか

がわれる。そのほか、読書に関して興味を引いたのは、本の内容そのものを楽しむとともに、本をかならず定期的に買いに行くことそのものが親の目からみると彼らにとってとても重要であるという印象をいだかせることであった。

4) 乗り物に関連した活動 (TABLE 7)

乗り物関連で圧倒的に多かったのは旅行で25例に認められた。このうち17例は自分で旅行計画を立ててひとり旅を楽しんでいた。彼らのPALは全例とも良好であった。彼らは時刻表や地図を使って自分の好きな路線を探したりしながら旅行計画を楽しみ、働いて得た金を使って一人で旅行するというものであった。一人で旅行できない例では家族一緒に旅行を楽しんだり(1例)、時刻表、車や鉄道関係の雑誌を熱心に読んだり、交通関係の催し物に出かけたりする例(7例)もあった。

症例3 20歳, 男性

PLDL Very Good, PAL Very good, 固執性+, 社会的処遇 就労(建築材製造工場)

余暇の過ごし方 日曜日に一人でバス旅行し、そのバスの回数券を購入して大切に収集している。音楽鑑賞(アルフィーという歌手の曲ばかり数年間聞いている)。ビデオ鑑賞。

症例4 20歳, 男性

PLDL Good, PAL Good, 固執性+, 社会的処遇 就労(電機関連会社)

余暇の過ごし方 乗り物、特に汽車が好きで自分で行き先を決めてでかける。行き先は何種類か決まっており、行った先の公園でお弁当を食べて帰るのがコースである。そのほかにはひとりでボーリングをするのを楽しみにしている。

症例5 27歳, 男性

PLDL Very Good, PAL Very Good, 固執性+, 社会的処遇 就労(バスガイド)

余暇の過ごし方 日本全国各地の各会社のバス

を見て回るのを目的とした旅行を一人でしている。バスの模型作りにも非凡な才能を示し、その資料を収集するために直接バス会社に手紙を書いたり、訪ねたり、時には著名な交通評論家を訪ねて、ご馳走になったりしている。そのほか、クラシック音楽、なかでも特にリヒャルト・シュトラウスに精通し、他の追従を許さないほど詳しい。

症例6 21歳, 男性

PLDL Fair, PAL Poor, 固執性#, 社会的処遇 作業所通所

余暇の過ごし方 自分の好きな決まった目的地やコースを決めて、好きな手段(バス、電車、乗用車など)で、一定の時間に行動する。また、毎日決まった時間にお風呂屋に行くのを日課にしている。

一人旅を好む例は発達水準の高い例がほとんどであったが、ドライブは発達水準の低い群に多い傾向があった。彼らは共通して乗り物に乗るのを好む傾向はあるが、発達水準が低い例では、主に親が運転してドライブに連れていくことになり、余暇までも親を巻き込んでしまい、自分の手足のように親を酷使してしまう。そのため、いつまでも親子の分離が困難になってしまうことが少なくない。

5) スポーツの実践 (TABLE 8) と観戦

彼らが実践していたスポーツの大半は個人種目で、相手を要する種目である卓球、剣道、バトミントン、テニスなどは例数として少なかった。

スポーツ観戦の例では、好きなチームを応援するプロ野球ファンもいたが、試合の経過をスコアブックにつけることや、スポーツ新聞や選手名鑑をみて12球団の選手に関するさまざまなデータを熟知することに没頭する例が少なからず認められた。また、公営ギャンブルの競馬や競艇の予想と結果をスポーツ新聞で確かめるのを唯一の楽しみ

TABLE 7 乗り物関連の余暇活動

旅行	25例
ドライブ	11
時刻表、鉄道や車の専門雑誌	7
自転車やバスで遠出	5
洗車	2
交通関係の催し物	2
空港にでかけて飛行機を眺める	1

TABLE 8 スポーツ実践の種類

水泳	9例	エアロビクス	2例
ジョギング	7	ジャズダンス	2
スポーツ教室	3	スケート	1
ボーリング	3	ヨガ	1
卓球	2	登山	1
剣道	2	魚釣り	1
バトミントン	2	テニス	1

にしている例もみられた。

6) ゲーム

自閉症児の好む遊びの代表格として英国自閉症協会のシンボルマークにも取り入れられているジグソー・パズルは5例と意外と少なかった。そのほか、ファミコン4例、ゲームセンターに通ってゲームを楽しむもの2例、オセロゲーム2例などがあった。パソコンを楽しんでいる高い発達水準の1例もあった。パチンコを好むものが1例みられた。彼のPLDLはGoodであるが、就労できず自宅とパチンコ店とを往復する毎日が一時続いて問題となっていた。授産所に通所できるようになってからこの習癖も消失した。彼らが楽しむゲームをみると、本来のゲームのように相手との駆け引きを必要とするような高度な知的能力を有するものはほとんどなく、ひとりで自己完結できるような類のものに限定されていた。

7) 収集

ここでも乗り物に関連したものの多さが目を引いた。具体的には、バスの回数券や、車や鉄道の専門雑誌、車の写真の切り抜き、地図、ミニカーなどがあった。そのほか、レコード、ポスター、アニメ・怪獣・歴史の本、切手、パンフレットなどがあった。レコードを収集している例で、音楽そのものにはさほどの執着を示さず、ただ必ず一定額の小遣いを日曜日ごとに浪費しないと気がすまないという自閉症特有な強迫性との関連が強い場合があった。

8) 創作活動 (TALBE 9)

創作活動の内容の検討は、彼らの就労を考える上でも参考になるが、絵画がもっとも多く、次いでプラモデルの製作、手芸、折り紙、切り紙、切り抜きなどが目立った。高水準の例では、小説を書いて自分の固有な世界を創造しているものもあった。

TABLE 9 創作活動の種類

絵を描く	11例	文字を書く(名前、番組名、地図など)	2例
プラモデル	5	カレンダーを書く	1
手芸	5	野球選手の似顔絵	1
折り紙、折り鶴	4	手紙を書く	1
切り抜き	3	小説を書く	1
ワープロを使う	3		
切り紙	2		

9) その他の余暇活動

以上述べてきた活動のほかには散歩を楽しむ例が多かった。PLDL不良群のなかには、散歩をしている時は精神状態もよいので、家族が積極的に近郊の遊園地、公園、山などに一緒にでかけるように努力している例が少なからず認められた。

症例7 20歳、男性

PLDL Very poor, PAL Poor, 固執性+, 社会的処遇 作業所通所

余暇の過ごし方 旅行に連れていくと生き生きとした表情になるので、家族みんなで一泊旅行をできるだけするように心掛けている。また、毎週土曜日、実家で夕食をみんなでした後にゲームセンターやボーリング場に出かけたりしている。そこでは自分でもするが、他人のするのを見て楽しんだりもしている。自宅ではテレビゲームを楽しんでいることが多い。スポーツをするのは嫌がる。

そのほか、家事を記載している例も男女にかなり認められた。家事は本来ならば、日常生活のなかでは余暇活動というよりも強制された活動といえるものである。しかし、彼らにとって家事は日常生活のなかで習慣化していくにつれ、それを自発的に楽しんで行っていることがうかがわれた。恐らく、生活の中で自分の役割を果たしていることによる生活の張りにつながる側面とみなせるのであろう⁶⁾。

また常同反復行為や強迫行為が顕著に認められる場合は、その行動を余暇活動とみなさざるをえないという側面がある。石井⁶⁾のいう被管理的余暇活動であるが、そのような例も少なくなかった。

余暇活動の内容は多彩で個人差もかなりあったが、活動そのものが強迫症状と化してしまい、楽しむというよりもそれをしないと気がすまないという心理状態になっている例がいくつか見られた。以下に述べる症例9はその典型例である。つまり、現実生活のなかで不適応状態を呈した例では、本来は余暇活動であった行動が強迫症状と化してしまい、それに没頭するため、ますます適応が困難になるという悪循環におちいていた。

症例8 21歳、男性

PLDL Poor, PAL Poor, 固執性卅, 社会的処遇 作業所通所

余暇の過ごし方 時計とにらめっこ。自分の腕時計にはかの時計が合っていないと他人のものでも合わせようとして困る。

症例9 18歳, 男性

PLDL Good, PAL Fair, 固執性卍, 社会的処遇 在宅

余暇の過ごし方 普通高校にまで通っていたが、学校で凄まじいまでのいじめに遭遇し、それでも休まずに登校を続けていたが、次第に自宅に引きこもるようになってしまった。現在は発熱や大雨のときでもジョギングを行わないと気がすまず、ジョギング以外の時間には何もしないで部屋にじっとしている状態が続いている。

症例10 18歳, 男性

PLDL Very good, PAL Poor, 固執性卍, 社会的処遇 在宅

余暇の過ごし方 普通高校に通っていたが、学校で女子生徒に向かって盛んに汚言を発するようになって学校で問題化し、ついに中退せざるをえなくなった。その後は、シティ情報誌を見てはアイドルが町に来る予定を手帳に細かくメモして、アイドルのコンサートやサイン会に出かけることだけに没頭する毎日である。

IV 考 察

1 今回の追跡調査結果について

今回行った追跡調査結果の詳細は別の機会に述べられている^{11,13,14)}が、過去の主な追跡調査結果^{2-5,7,16-18,21-24)}に比して今回の調査対象が良好な転帰をたどった理由としては次のようなことが考えられた¹⁴⁾。すなわち、第1には、わが国の過去の主な報告の対象児が自閉症児のための特殊教育を十分に受ける機会がなかった【第1世代の自閉症】²⁴⁾とすると、今回の対象児はその後の自閉症児への教育が次第に浸透していった時期に教育を受ける機会がもてた【第2世代の自閉症】であったこと、第2には、今回の対象児が一般の精神科臨床場面で遭遇する受診例のみでなく、九州・山口地区の広範な地域を対象に自閉症療育の啓蒙運動をもひとつの目的とした自閉症児療育キャンプ¹²⁾に対象児の大半が参加していた¹⁰⁾た

め、療育への高い動機づけをかなり長期間にわたって持ち続けることができたこと、第3に、高機能自閉症児は医療機関との関係がきれることが多いために追跡調査が困難になりやすいが、今回の追跡調査での把握率が非常に高く、高機能自閉症も十分に把握できたこと、第4に、わが国が現在好景気による労働者不足のために彼らも就労の機会が比較的多くもてたこと、第5に、転居によって遠方へ移動した対象児は非常に少なく、同じ地域で継続した療育が比較的受けられたこと、そして最後に、九州では1974年から自閉症親の会が組織され、自閉症療育に対する啓蒙活動が盛んに行われてきたことなどであった。

2 青年期・成人期自閉症者の余暇活動の特徴について

今回の調査方法は自由記載方式であった。そのために余暇活動の分類に統一性を欠く一面があったことは否めない。しかし、保護者側からみて最も目立った活動を中心に記載されたため、かえって彼らの余暇活動の実態を具体的に浮き彫りにすることができた。したがって、今回の調査の内容は現在青年期・成人期に達している自閉症者の余暇活動の実態をほぼ反映しているとみなしてもさしつかえないだろう。そこで、今回の調査結果からみた自閉症者の余暇活動についていくつか特徴を取り上げて検討してみたい。

彼らの発達水準の違いによって余暇活動の内容にどのような差があるだろうか。余暇活動がほとんど認められない例では、発達水準が低く、なかでも言語発達水準よりも適応水準が極めて不良であった。このことは余暇活動と適応水準との強い関連を示しており、間接的にはあるが余暇活動の重要性を示唆するものといえよう。

言語発達水準による余暇活動の内容の違いをみると、良好群 (Very good と Good) に旅行や読書が多かったが、不良群 (Poor と Very poor) には買い物、散歩、ゲームなどが多かった。創作活動とスポーツは比較的 Good ないし Fair 群に多かった。

自閉症の多くが男性であることを考えると、乗り物に強い関心がみられるのはさほど驚くに値し

ないが、旅行を一人で楽しんだり、適応に問題のある例では放浪癖という形をとっており、これも旅行とある種の共通な要素があるように思われる。彼らがなぜ一人で旅行したり、放浪することに強い動機づけをもっているのであろうか。彼らと日頃接していると、現実生活のなかで遭遇するさまざまなストレス状況から解放されたいかのように、以前通っていた学校に突然出かけたり、休日になると決まって幼児期馴染んだ遊園地巡りをする例に遭遇することは稀ではない。その理由の一つには、発達水準によって行動形態は多少異なるが、これらの行動は彼らにある種の安らぎを与えるための現実からの回避的行動ではなかろうか。突然、幼児期の体験を生き生きと再現したり、描写するさまをみるとこのような余暇活動は自閉症者の time-slip 現象²⁰⁾ともいわれる時間体験の特殊性を反映しているようにも思われるのである。またひとり旅は精神発達上の大きな課題である自立を象徴する行為であることを考えると、このような行動が青年期・成人期に達した自閉症者に多く認められるのは、彼らもこの時期心理的自立を達成していることを示す証左であるといえよう。幼児期から殊のほか乗り物に限局した興味を示していた彼らが成長した姿を一人旅という行動で示していることは、彼らの興味の対象を長年はぐくみ開花させている現象ともみなせるであろう。

読書の内容はさまざまであったが、発達水準の低い群に本を買う行為そのものも重要であると思われたことは、彼らの行動特徴の一面を示している。内容をどのように楽しんでいるか容易には把握できないことにもよるが、本の収集自体に非常な重きが置かれていることは確かであろう。一度始めた行動を途中で省略できないという自閉症者特有の強迫性⁹⁾がこのような行動に駆り立てているとも考えられよう。買い物を楽しむ例が発達水準の低い群に多いことは、こうした特徴を裏付けているのではなかろうか。

スポーツ活動を見ると、観戦を楽しんでいる例は極めて少なかった。スポーツが競技という性格をもち、相手の動きを予測しながら駆け引きを楽しむといった高度な社会性を必要とする活動であることを考えると、彼らにとってそれは不得手で

余り好まれないのは当然といえよう。実際、高い発達水準を示す自閉症者のスポーツ活動を通してみた運動技能や社会的技能を検討すると、自閉症者のもつ基本的障害が依然として根強く残存しているため、スポーツ活動を楽しむまでの社会性を獲得することは容易なことではない¹⁵⁾。Very good 群でスポーツの実践を楽しむ例がほとんどなかったのは、このことを端的に示している。しかし、Good ないし Fair 群でスポーツ活動を楽しんでいる例が多かったのはなぜであろうか。知的に高い例では、先に述べたように一人で旅行の計画を立てて楽しむという知的好奇心を満足させるような活動が可能になる。その知的水準までいかない場合には、家族も彼らに対して発達早期からさまざまな身体運動に取り組みさせていることが多い。このような療育活動の蓄積によって彼らの生活習慣のなかにしっかりとスポーツ活動が根を張ってきたのであろう。彼らの行っているスポーツの実践内容をみると、相手を必要としない一人で実行可能な種目が大半を占めていることにもそのことがうかがわれるのである。

次いで創作活動の内容を検討してみると、従来から言われてきた彼らの得意とする活動が端的に示されている。常同反復的行為を主体とし、かなり高い視覚認知機能と根気を必要とする活動である手芸、折り紙、切り抜き、切り紙などを楽しんでいるのである。このような特性を彼らの作業種目に積極的に生かしている例は作業所や授産所でよく見かけるが、余暇活動でも同様なことがうかがわれて興味深い。

発達水準の低い群で余暇活動をどのように育てていくかは彼らの生活援助を考える際に極めて重要である。症例7のように家族ぐるみで旅行、散歩、買い物などに連れていくことによって彼らの精神状態の安定に努めている例がある。余暇活動は本来、親や他人の援助や介助を必要としない形で行われることが望ましいが、生活経験が乏しく、自らの力のみでは余暇活動を開拓することが困難な例では、余暇活動のスキルを習得するためのプログラム²⁵⁾が必要になろう。それさえ困難な例では、家族や療育スタッフの積極的な援助も要求されよう。ただし、家族の援助が自己犠牲的なも

のにならないで、あくまで家族ぐるみで楽しむような形態にもっていけるようになることが最も望ましいことは今更いうまでもない。症例7のように一人では実行困難な余暇活動をどのような形で援助していけばよいか今後検討すべき課題であると思われる。

以上、彼らの余暇活動の内容を検討してみると、従来からいわれてきた自閉症児の創造的遊びの困難さや、空想上の人物や作者の同一化によって虚構の世界を楽しむという精神活動の限界が、ごく稀な例外を除いて、ここにも如実に反映していることが明らかになった。小林らは先の追跡調査結果の報告^{13,14)}のなかで、高い知的水準を示していた例で良好な適応水準にないものが決して少なくないことを述べている。これらの例では、不適応反応の際に空想傾向が増強し、現実的対人関係の成立が非常に困難になることがしばしば認められる。すなわち、精神内界が比較的豊かな例になると、現実逃避の手段として空想世界へ回避しやすい⁸⁾。つまり、創造性や精神世界が比較的豊かであることそれ自体は彼らの予後を占う際に、必ずしも好ましい要因とはならないことは忘れてはならない。

そして最後に指摘しておきたいのは、もともと余暇活動はかなり豊かであったにもかかわらず、学校現場でひどいじめにあったり、なんらかの不適応状態におちいった場合には、余暇活動そのものが強迫化傾向を強め、症状化してしまい、ひどい場合には制縛状態までももたらす危険性があることである。余暇活動自体のスキルを習得させていくための指導の重要性²⁵⁾はもちろんいうまでもないが、余暇活動そのものが人生を豊かにするためには、彼らの現実生活の適応状況の改善がなにより重要なことがわかる。つまり、自閉症者は決して現実を回避した行動を好むのではなく、あくまで他者との交流を通じた現実生活のなかでの楽しさや充足感を求め^{1,9)}、それが達成されて周囲から認められることによって初めて、彼らの余暇活動に彼ららしい楽しみ方が表現されるようになるのである。その時こそ自閉症者自身の人生も充実し、彼らのライフスタイル⁹⁾が確立されたといえるのではなからうか。

本論の要旨は第65回小児精神神経学研究会(1991.6.14-15, 川崎医療福祉大学)において発表した。

今回の調査にご協力いただいたご家族の皆様にご感謝申し上げます。本研究は朝日新聞西部厚生文化事業団からの助成金と福岡県による福岡大学医学部自閉症治療研究班(班長:村田豊久)への助成金によって行われた。

最後に、日頃から多くのご助言をいただき、本論のご校閲をしていただいた村田豊久院長(村田クリニック)に心より厚くお礼申し上げます。

文 献

- 1) 別府悦子(1990): 自閉性障害児・者の生活と発達に関する調査研究. 小児の精神と神経, 30, 165-174.
- 2) DeMyer, M. K., Baraton, S., DeMyer, W. E., et al. (1973): A follow-up study. J. Autism Child. Schizophr., 3, 199-246.
- 3) Gillberg, C. (1991): Outcome in autism and autistic-like conditions. J. Am. Acad. Adolesc. Psychiatry, 30, 375-382.
- 4) Gillberg, C & Steffenburg, S. (1987): Outcome and prognostic factors in infantile autism and similar condition: A population-based study of 46 cases followed through puberty. J. Autism Dev. Disord., 17, 273-287.
- 5) 石井高明(1978): 自閉症の長期予後. 臨床精神医学, 7, 907-912.
- 6) 石井高明(1983): 余暇の過ごし方を通してみた年長自閉症の生活の仕方. 厚生省心身障害研究班(班長:佐々木正美): 自閉症の本態, 原因と治療法に関する研究. 昭和58年度研究報告書, 108-110.
- 7) Kanner, L. (1971): Follow-up study of eleven autistic children: Originally reported in 1943. J. Autism Child. Schizophr., 1, 119-145.
- 8) 小林隆児(1982): 言語障害からみた年長自閉症児者に関する精神病理学的考察. 児精医誌, 23, 235-260.
- 9) 小林隆児(1986): 働く自閉症者の生活様式の特徴. 精神科治療学, 1, 205-213.
- 10) 小林隆児(1990): 自閉症児朝日療育キャンプ参加児の追跡調査. 第9回自閉症親の会九州大会(大分)記録, 14-39.
- 11) 小林隆児(1991): 青年期・成人期の自閉症. こころの科学, 37, 50-57.
- 12) 小林隆児・村田豊久(1977): 自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察. 児精医誌, 18, 221-234.
- 13) 小林隆児・村田豊久(1990): 201例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題. 発達心理学と医学, 1, 523-537.
- 14) Kobayashi, R., Murata, T., and Yoshinaga, K. (1992)

- : A follow-up study of 201 autistic children in Kyushu and Yamaguchi areas, Japan. *J. Autism Dev. Disord.*, (印刷中)
- 15) 小林隆児・岡村克巳 (1990) : 成人期自閉症の運動技能と社会的技能における基本障害. *発達心理学と医学*, 1, 367-377.
- 16) Lotter, V. (1974) : Social adjustment and placement of autistic children in Middle-sex : A follow-up study. *J. Autism Child. Schizophr.*, 4, 11-32.
- 17) Mittler, P., Gilles, S. & Jukes, E. (1966) : Prognosis in psychotic children : Report of a follow-up study. *J. Mental Defic. Res.*, 10, 73-83.
- 18) Rutter, M., Greenfield, D. & Lockyer, L. (1967) : A five to fifteen year follow-up study of infantile psychosis II. Social and behavioural outcome. *Br. J. Psychiatry*, 113, 1183-1199.
- 19) 佐々木正美 (1991) : 自閉症の神経心理学的理解と治療教育. *小児神経学の進歩*, 20, 113-134.
- 20) 杉山登志郎 (1990) : 自閉症—最近の研究の進歩—, *精神科治療学*, 5, 1505-1515.
- 21) 玉井取介 (1977~1978) : 自閉症の追跡調査 I~IV. 横須賀: 心身障害児教育財団.
- 22) 若林慎一郎 (1987) : 自閉症の転帰と成人期の問題. 山崎晃資・栗田 広 (編) : *自閉症の研究と展望*. 東京大学出版会, 75-99.
- 23) 若林慎一郎・水野真由美 (1975) : 幼児自閉症の予後についての研究. *児精医誌*, 16, 177-196.
- 24) 若林慎一郎・杉山登志郎 (1986) : 成人になった自閉症児. *精神科治療学*, 1, 195-204.
- 25) Wehman, P. (1983) : Recreation and leisure needs : a community integration approach. Schopler, E. and Mesibov, G. B. (Eds.) : *Autism in adolescents and adults*. Plenum Press, 111-132. 中根 晃・太田昌孝 (監訳) (1987) : *青年期の自閉症①個人生活の確立*. 岩崎学術出版, 130-156.

Japanese Journal on Developmental Disabilities, 1992, Vol. 14, No. 1

A Study of the Leisure Activities of Autistic Adolescents and Adults

Ryuji Kobayashi
(Oita University)

The author investigated the leisure activities of autistic adolescents and adults who were in a follow-up study in 1990. The results were as follows :

1. All of those who had poor leisure activities were poorly adapted to society.
2. There were many who enjoyed listening to music on records or TV, but few who enjoyed playing music instruments.
3. Those who enjoyed reading books also seemed to go shopping for books regularly, collecting them. This was seen to be related to an obsessive tendency.
4. There were many who had good or fair development who enjoyed individual sports.

This seems to be a result of daily therapeutic training.

5. There were many in the good or very good groups who enjoyed traveling by themselves. It seems to show their psychological independence or desire for freedom in their daily lives.

6. Creative activities depended on the characteristics of each person's cognitive abilities.

The characteristics and meaning of the leisure activities of autistic adolescents and adults were discussed.

Leisure activities are important for adapting well to daily life making life more fruitful.